



# 宮崎大学学術情報リポジトリ

## University of Miyazaki Academic Repository

### 宮崎大学教育学部附属小学校における「こども哲学」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター 公開日: 2017-04-01 キーワード: 作成者: 柏葉, 武秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/5968">http://hdl.handle.net/10458/5968</a>

# 宮崎大学教育学部附属小学校における「こども哲学」

柏葉武秀

## On 'Philosophy for Children' in the Elementary School Attached Miyazaki University

Takehide KASHIWABA

### 1. はじめに

本稿の目的は2016年度に宮崎大学教育学部附属小学校で行われた土曜講座「やってみよう！こども哲学」の実践報告と若干の分析である。土曜講座は附属中学校・小学校PTA主催の企画であり、大学教員は中学生あるいは小学生に対して授業を行う。その目的は二つある。一つは児童生徒に大学での専門を生かした啓発的な内容の授業を受けてもらい、知的好奇心を喚起することである。もう一つは、教員養成系学部の大学教員が初等中等教育の現場で直接児童生徒に接し、授業を受け持つ経験を積んで大学での研究と教育に生かしていくという一種の研修である。後者の目的のゆえに、この企画は教育学部におけるFD活動（「附属学校園を活用したFD活動」）の一環として位置づけられてもいる。

筆者は2014年度から始まった土曜講座すべてにおいて参加の機会に恵まれている。タイトルは年によって異なるけれども、そこで試みてきたのは「こども哲学」である。そこでまずこども哲学とはなにかを簡単に紹介しつつ、今回の土曜講座での工夫と授業のねらいを示す(1)。その後じっさいの授業準備と当日の具体的な進行とを再構成し(2)、大学講義での経験とあわせて若干の考察を試みる(3)。

### 2. こども哲学とはなにか

こども哲学とはPhilosophy for Childrenと呼ばれる活動を日本語に訳した名称である。「子どものための哲学」と訳されることもあり、単に「P4C」と略記する場合もある。この活動はすでに全国各地の小学校、中学校、高等学校で試みられている。筆者が土曜講座に臨むにあたって研修を受けた組織にかぎっても、東京には「アードコーダ」<sup>1</sup>があり、大阪には「p4c Japan」<sup>2</sup>がある。リップマン（2015）やキャム（2015）といった先駆者の著作が邦訳されており、教育現場に適用できる具体的な方法論をも読むことが可能となっている。こども哲学の定義は、さしあたり「対話によって思考を深める活動」（河野 2014, 28）でつくされていると思うけれども、

この節では筆者が保護者向けに書いた案内をリライトして筆者なりの理解としておく<sup>3</sup>。

こども哲学とは、講師が教壇から古今東西の哲学者のありがたいお言葉を知識として教え込もうとするものではない。こどもたちが自ら考えてみたい問いを探し出し、こども同士で話し合っていく対話実践のことである。対話としての哲学と呼ぶのが適切かもしれない。

邦訳されている「こども哲学」の絵本のタイトルを紹介するとイメージがわきやすいかもしれない（ブルフィニエ）。「よいことと、わるいことってなに?」「きもちって、なに?」「いっしょにいきて、なに?」「知るって、なに?」「人生って、なに?」「自分って、なに?」「自由って、なに?」。このような、ふだんは取り立てて考えないけれども、ときに気になってしまふ事柄を、じっくりと考えてみるのが目的となる。もとより、こどもが話し合ってみたところで、そう簡単には答えは出ない。答えを出すというよりはむしろ、答えの出ない問いをしっかりと考える経験をすることこそがこども哲学の目的とあってよい。

講師はこどもが対話しやすい雰囲気を確認し、じっさいの発言を促し、整理し、問いを深めていく係を務める。あくまでもこどもの対話に参加しともに学んでいくスタンスで臨むということである。

児童生徒の対話を促しながら、興味関心のある問題を考えていくために、講師と児童生徒と一緒に車座になってディスカッションしていくのが子ども哲学のオーソドックスなスタイルである。筆者も附属中学1年生30名弱との子ども哲学実践ではこのスタイルを導入している。だが、今年度はあえて通常の授業方式を取ることにした。一つには、参加児童の学年構成が多様であったからである。附属小学校の受講者は4年生、5年生、6年生の3学年に渡るものであった。昨年度の土曜講座では5年生と6年生混合で車座となって対話を試みたところ、発言のほとんどは6年生からなされ、5年生は萎縮して二言三言口にするのが精一杯のように見受けられた。筆者が小学生の学年別発達度合いを甘く見積もっていたがゆえの失敗である。昨年度の失敗を反省し、今年度ごく一般的な授業としたわけである。そのかわり、児童同士の対話機会を保証するための工夫を凝らしておく。授業冒頭で小グループを編成し、各グループのメンバーには必ず3学年から一人以上属するように配慮する。授業では講師側の発問に児童が答えることで議論が進む形となるので、発問への応答をそのつど小グループで話し合ってもらうように指示している。この工夫によって、小グループ代表が発問に対するグループの見解を発表し、小グループ同士あるいは全員でその見解をめぐって対話できると期待していた。当日は期待以上の対話がなされたと思う。

授業方式を採用したもう一つの理由は、土曜講座が大学教員のFD活動に位置づけられているからである。この2年間はこの側面をほとんど無視してきたので、今年度は正面からFDとしての土曜講座を企画してみたのである。すなわち、大学での講義と同一の内容で小学生に授業してすることを試みている。次節で詳述する授業で扱うトピックは宮崎大学教育文化学部での講義（「哲学史II」「欧米思想」「人間と倫理II」）さらに非常勤講師として務めた宮崎公立大学での講義（「ヨーロッパ文化論」「哲学」）に組み込まれていたものである。小学生に見せたスライドは、これら大学講義に向けて作成されたスライドに基づいている。違いは受講生が大学生（全学年）であるか、小学生（4年生から6年生で）あるかにすぎない。それゆえこの授業では、大学教育における筆者の力量が、小学生を前に容赦なく試されるはずである。「暗記ではなく考え続けること」をスローガンにして、哲学・倫理学講義を担ってきた筆者にとっては、講義の相手が小学生であろうと大学生であろうと、講義・授業の結果に対していっさいの言い訳が

効かない。

### 3. 土曜講座「やってみよう！こども哲学」の実践

2016年度土曜講座「やってみよう！こども哲学」は10月15日、附属小学校多目的教室で開かれた。時間は10時から50分と小学校高学年の授業一コマ分である。受講者は4年生5名、5年生2名、6年生5名の計12名、男女の比率はやや女子が少ないのが残念であった。

この授業のテーマは哲学的な人格同一性論である。「人格同一性」における同一性とは、異なる時点時間を通じてあるものが同一であるといわれるときの同一性つまり「通時的同一性」のことである。具体的にいえば、「昨日の私」と「今日の私」、さらには「明日の私」がつねに「同じ私」といえるのはなぜかが問われる。人格同一性の基準には有力な二つの説が提案されている。一つは心理的連続性を重視する「記憶説」である。17世紀のロック以来の伝統をもつこの立場では、過去から現在に至る記憶が保持されていることが人格同一性を保証するとされる。現在では記憶以外にも信念、欲求などの連続性も含まれるの通例である。もう一つが物理的連続性を基準とする「身体説」である。身体説によれば、身体が同一であり続けることが人格同一性を保証することになる。

数ある人格同一性論のなかから、この授業で題材としたテキストはパーフィットの『理由と人格』である(1998)<sup>4</sup>。パーフィットは卓抜な思考実験を駆使して人格同一性自体が重要なのではないという刺激的な結論を導き、独自の非人格的で還元主義的な主張を繰り出している。授業ではパーフィットの結論に拘泥せずに議論の流れを取り出したうえで、一連の思考実験だけを用いて児童が人格同一性の問題を考えていく手がかりとした。「私とはなにか」を児童が、そうとは知らずに自然な流れで考えていく仕掛けにしたつもりである。

導入では、特段哲学の定義のような堅苦しい講義は避けて授業の趣旨とルールを説明するにとどめる。ルールは下記の三つのみである。

「じぶんの意見を恥ずかしがらずにいきましょう  
ほかのひとの意見をしっかりと聞きましょう  
どんどん質問しましょう」

授業は「ドラえもん」の「どこでもドア」をDVDで見せるところから始まる。用意したスライドでの発問ごとに区切り、児童の発言と筆者のコメント・分析を記しておく。

#### 発問1 「かんがえてみよう」

「どこでもドアがほんとうにあるとします。  
みなさんは使ってみたいですか。  
それはどうしてでしょう。  
それとも使うのはいやですか。  
それはどうしてでしょう。」

## 児童の発言

使ってみたいという意見が多数派であった。一部に「どこでもドアで学校に行くのはずいので使いたくない」という声もあった。この児童は「どこでもドアを使うことの道徳的可否」を聞いたかっただと思われる。この問題意識は貴重ではあるけれども、授業のねらいからずれてしまうので、残念ながら正面から取り上げることはできなかった。

## コメント・分析

導入としては良好の反応を得られたので成功だった。DVDを見せた時点で、笑い声がわき、緊張がほぐれていくさまが見てとれた。

次のスライドでは、どこでもドアは実はたいへん高度な3Dプリンタだったと考えることができることを示した。じっさいの3Dプリンタの映像を見せながら、ドラえもんが来たと想定されている22世紀では想像を超えるほど精巧な3Dプリンタが開発されていると考えてみようとして提起したのである。つまり、3Dプリンタのように、人のいわば「設計図」から三次元の人間が異なる場所で作り出されるのがどこでもドアの仕組みだと仮定したわけである。

以上のように、この授業ではパーフィットがオリジナルの思考実験で使われていたスキャナー付きの遠隔輸送機を、どこでもドアに「翻案」している。スキャナー付きの遠隔輸送機は「スタートレック」などのSF作品に頻繁に登場する装置である。「ドラえもん」も一種のSFと見なせるので、どこでもドアが遠隔輸送機だと思いつくごく自然であるだろう。とはいえ、この「翻案」は必ずしも筆者の独創ではないことは明記しておきたい<sup>5</sup>。

## スライド（2枚）

「女の子が家でどこでもドアに入ります  
女の子がドアに入ったしゅんかんに、すっかり消えてしまいます  
でも大丈夫！  
女の子の「設計図」が学校まで送られていたのです  
学校でどこでもドアが開きます  
女の子が「設計図」からまるごとつくりだされました」

このような解説を行い、児童が理解できているかを確かめる。3Dプリンタは近年メディアでもよく取り上げられており、安価な製品が市販されていることもあって、児童もよく見知っている。どこでもドアが3Dプリンタと同類であるとの設定にすぐになじんでくれた。そこで次の質問を投げかける。

## 発問2 「もっとかंगाえてみよう」

「どこでもドアがこのようなしくみだったとします。  
みなさんは使ってみたいですか。  
それはどうしてでしょう。  
それとも使うのはいやですか。」

それはどうしてでしょう」

### 児童の発言

使いたくないとまではいかないが、あまり気持ちがよくないとの言葉が発せられる。深く考えているというよりも戸惑っているようであった。

### コメント・分析

ねらいどおりの反応である。児童に当惑してもらうのがこの発問の目的だったからである。数分前まではどこでもドアを大喜びで使いたがっていた児童が、どこでもドア仕組みが3Dプリンタである（想定上の）事実を知ったとたん先ほどの発言を考え直し始めている。この当惑こそがこの授業に於ける哲学的問いを起動する。

その問いとは先に簡単に触れた哲学的な人格論における二つの潮流に関わる。超高性能3Dプリンタを内蔵したどこでもドアを使うとき、転送される人物は一瞬間とはいえ消去される。消去という事態を当該人物の死と考えることもできよう。それゆえ、児童は戸惑ったのだと思われる。その場合、当該人物が死んだと考える理由は三つあげられる。「身体が一瞬消滅した」からなのか、「精神あるいは心が一瞬途切れた」なのか、それとも心身共に一瞬消えてしまったのか、である。専門的な言葉づかいをするならば、身体説（「身体的連続性」）と広義の「記憶説（「心理的連続性」）のどちらに力点を置いて人の死を考察しているのか、あるいはその区別に頓着しないのか、の三つの可能性があるということである。授業する側としては、児童がいずれの理由を無自覚に抱いているとしても、ある程度の応答はできるよう準備はしている。次の発問への応答次第で、この授業では人格同一性問題のどの側面に焦点を当てていくべきかが決まる。

この問いを小グループで議論している間、児童の口から「なかみ」という言葉が聞こえてくるようになった。「なかみ」が転送されるならば、3Dプリンタ装備のどこでもドアを使いたいという文脈のようである。「なかみ」の内実が判明するのも次の発問後であった。

### 発問3 「もっともっとかんがえてみよう」

「女の子がどこでもドアで学校についてから、5秒後に家の女子は消えてしまいます。

みなさんは使ってみたいですか。

それはどうしてでしょう。

それとも使うのはいやですか。

それはどうしてでしょう」

### 児童の発言

「自宅にいる女の子は偽物で、学校にいる女の子が本物である」「自宅にいる子はぬけがらみたいなもの」という発言がある。おおむね学校にいる少女を身近に感じつつ、5秒間だけ家に存在し続ける女の子はなにかまがいものであるとの感触を抱いている。

## コメント・分析

ここにきて児童の関心が明確な姿を見せる。問いの焦点は「本当の自分」はなにかであった。どこでもドアに入るときに消えてしまい、学校に着いたのは本当に当該の少女といえるかに疑念を抱いたのであろう。どこでもドアに入った少女と無事学校に現れた少女が5秒間共存しているとの設定に接して、児童はどちらが本物かひいては「本物」の基準はどこにあるかへと議論を進めていったのである。

児童が取り組んだ問いは次のような含みをもっている<sup>6</sup>。便宜的に、どこでもドアに入った後になお5秒間自宅にとどまっている少女を少女1、どこでもドアを開けて学校にいる少女を少女2としておく。少女1と少女2は、想定上少なくともどこでもドアを使う前の記憶は同一であり、身体にも一切の差異は不在である。したがって、記憶説を採用したとしても身体説を採用したとしてもふたりの少女は同一人物であることになる。心理的連続性も身体的連続性も備えているのだから、人格同一性の基準を満たして余すところはないはずである。そうであるとすると、5秒後に少女1が消滅するのを怖れる必要はないと思われる。というのも少女2と少女1は同一人物であって、少女2は5秒後も生き続けるからである。

しかし、この例を自分に置き換えてみると事情は大きく変わってくるだろう。同じようにどこでもドアに入った後になお5秒間自宅にとどまっている私を「私」1、どこでもドアを開けて学校にいる少女私を「私」2とする。先の思考実験との違いは、少女を私自身にいわば「代入」してみただけである。このときどこでもドアを使うことに私はまったく躊躇しないだろうか。おそらくためらいを感じないとはいえないのではないか。私はどこでもドアを開けて中に入ると「死んでしまう」と恐怖を感じるのではないだろうか。じつは発問2を前にして児童がとまどったのは、この恐怖感に似た感情に襲われたからだと思われる。あなた自身はどこでもドアを使ってみてみたいですかと問われたとき、超高性能3Dプリンタで消去されて「死んでしまう」あるいは自分自身が不可逆的に消え去ってしまうと感じたと推測される。この点においては、事態は瞬時に「私」1が消滅しようと、5秒後に消滅しようとなにも変わらないのである。

ところで、少女1と少女2は心理的にも身体的にも人格同一性の基準を満たしていた。まったく同様に、「私」1と「私」2も人格同一性の基準を完全に満たしている、すなわち同一人物であるはずである。そうであるにも関わらず、私は「私」1の消滅を怖れるとするならば、じつは私は「私」1と「私」2が同一人物つまりはこの同じ私であるとは信じていないことになるだろう。したがって、私は自分自身の同一性を心理的・身体的連続性を越えているなにかだと信じているのである。逆方向からこうもいえる。記憶や身体状態がいかに変化しようとも「私」はつねに同一である。なぜなら人格同一性は心理的・身体的連続性に依存することがないからである。このような思考の典型にはたとえばデカルトのコギトを挙げることができよう。

もちろん児童がデカルトの名前を知っているとは思われない。にもかかわらず、その思考にたどり着こうとしていた事実は注目すべきである。児童が作り上げてきた少女1と少女2のどちらがほんものの少女なのかという問いは、両者を同じ少女とみなすことに抵抗を感じるからこそ発せられたのであろう。先にほのめかされていた「なかみ」は少女を本物の少女とする基準を意味していたこともこの時点で明らかとなる。

この「なかみ」とはなにかをさらに筆者が問いかけていくと、ある6年生の児童が「意識」だと答えてくれる。その児童がいうには「意識=自分」なのである。この「意識=自分」テーゼをめぐる児童の間でさらに議論が闘わされて、最終的には「意識」とは「生きているとき

の私の考え」と再定義された。児童が意識という言葉を知っており、おおよそ正確な定義に至ったことは驚きであった。再定義に至るプロセスに対する筆者の介入はごくわずかであって、ほぼ児童の共同的な思考の産物であった。

児童の議論はさらに先に進んでいく。その方向は発問3の哲学的なもう一つの含みに近づいていった。もう一度「私」1と「私」2について考えてみよう。さきほどは両者が異なるはずだとの直観を私たちが抱いていることが確認された。しかし児童は戸惑いながらも発問2に肯定する向きもあった。発問2と発問3ではどこでもドアの仕組みはほとんど変化がない。発問2のどこでもドアは正常な機能を発揮していて、そのおかげで学校に「私」2が現れるのと同時に自宅の「私」1が消滅する。それに対して、ごく些細なバグが発問3のどこでもドアに生じたので、自宅にいる「私」1がたまたま5秒遅れて消滅するだけである。発問2にも潜在的に「私」1と「私」2が存在していたと考えることが可能なのである。この場合、「私」1と「私」2が異なる存在者であるとする、どこでもドアの意味が根底的に変わってしまう。しかも、両者には心理的・身体的連続性が堅固に保たれているのである。したがって、「私」1と「私」2が同じ私であると考え余地は大いにある。児童もまたこの可能性に気づいていたのだろう。自分が消滅するかもしれない戸惑いだけではなく、自分がふたり存在する可能性への当惑を感じていたのであろう。授業終了間際のある児童の発言がその証拠となる。

「5秒間の間にたくさんの自分ができる。そうすると永遠の命がありうる」

やや唐突に述べられたこの意見には心底驚愕したものである。この発言はパーフィットの思考実験から引き出されるもう一つの含みそのものなのである。「私」1と「私」2とが同じこの私であると認めてよいのであれば、それは直ちに複数の「私」の存在を肯定することにつながる。「私」1にとって「私」2はある種のレプリカと考えてよいだろう。心理的・身体的連続性が保証されるなら、私は自分のレプリカをつぎつぎと乗り換えていけばよい。レプリカが産み出され続けるかぎり、私は決して死なないのである<sup>7</sup>。

この思考実験を大学で講義するときには必ず現代版「魂の不死」説に触れてきたのだが、まさか小学生がそこまで議論を掘り下げていくとはまったく予想さえできなかった。この主張が人格同一性は心理的・身体的連続性をこえたなにかとの私たちのもう一方の直観と齟齬を来しているのは容易に見てとれよう。とはいえ、その自覚を児童に求めるのは望蜀というものである。パーフィットの思考実験を、3学年にわたる児童が互いの意見に耳を傾けつつ徹底的に考え抜いた結果、大学での講義の水準に照らしても十分な議論ができたことを強調しておきたい。

授業は用意していたスライド一枚を割愛して、終わりを迎える<sup>8</sup>。最後に授業の「種明かし」をしておいた。受講してくれた児童にとってはもはや蛇足にすぎない。

最後のスライド：今日なにをかながえてみたの？

「じぶんってなに？」

家でどのじぶんと、どこでもドアをつかったあとの、学校でのじぶんはおなじじぶんの？  
どうして？」

#### 4. むすびにかえて

今年度の土曜講座「やってみよう！ こども哲学」は、児童が活発に意見を述べ高度な議論を行った事実からすると成功であったと評価できるだろう。筆者も大いに満足している。とはいえ、時間をおいてふりかえてみると不十分な点にも気づかされる。最後にこども哲学の観点と、FD活動の観点からそれぞれ残された課題を整理しておきたい。

児童が哲学的議論を楽しんでくれたのはたしかであった。しかし、この場合の「哲学」とは大学で専門的に学ぶ学問を意味する。児童は自分たちが本当に考えたい問題あるいは切実に感じている問題に取り組んだかといえば、はなはだ疑問である。児童が大学生顔負けの発言を繰り返した事実は、裏を返せば講師である筆者が授業全体を通じて児童の思考の流れをコントロールしてしまったことの証左ともいえる。これではこども哲学の趣旨にそった授業とは言いがたい。

また、対話実践を旨とするこども哲学としても不満が残るものとなった。指導案では「自由な討論」の時間を15分とるべく計画していたのに対し、じっさいには講師が教壇で児童に向けて「お話し」をする講義スタイルに終始してしまった。児童間の対話はもっぱら小グループ内で完結してしまう。受講者全体にディスカッションが広がったときもあるにはあったけれども、その場合でも筆者にむけて児童の一人が回答するというステップを踏まねばならなかった。つまり、筆者が回転軸の役割をはたすことはじめて対話が円滑に回っていったのである。「児童の対話が自律的な活動たり得ていたか」と問われるならば、必ずしも肯定的には答えられないと思われる<sup>9</sup>。

FD活動の観点から捉えかえすならば、今回の土曜講座からは一つの教訓を導くことができる。それは、大学教員は初等中等教育における授業論を学ぶ必要があるということである。容易に推察できるように、同一内容の講義を受講した大学生は、土曜講座を受講した小学生に比べて、理解度においても思考の深まりにおいても著しく見劣りする。その理由は大学生の学力不足をはじめにいくつか考えられるけれども、今回痛感したのは小学生が大学生に比べて「議論・討論」に慣れていることである。筆者が附属小中学校の授業を参観したかぎりでは、授業で小グループに分かれて議論し意見をまとめて代表が発表する取り組みは、さまざまな教科でごく一般的となっている授業方法である。このようないわば議論ベースの授業を受け続けているがゆえに、はじめて出会ったメンバーであっても、教科ごとの学習内容に密着した素材でなくとも、しっかりと哲学的対話に入ることが可能であったと思われる。したがって大学においては、哲学・倫理学の講義においても、初年次教育科目やいわゆる「教養教育」（宮崎大学では「基礎教育」）科目においても、対話の経験を積む機会を学生に提供することが重要である。ひるがえっていえば、大学で哲学関係科目を担当する場合においてはこども哲学がひとつのモデルを提供してくれることはまちがいない。

## 参考資料 1

## 指導案

ねらい	こども哲学を体験する。本当の私とはなにかという問題を提示し、考えてもらう。	
学習活動	0 導入（講師自己紹介）と説明 1 ドラえもん「どこでもドア」鑑賞と解説 2 「どこでもドア」を用いたパーフィットの思考実験 3 自由に話し合う 4 感想記入	5分 10分 10分 15分 5分
指導上のポイント	<p>○「どこでもドア」（アニメで）を見せて、使ってみたいかを問う。</p> <p>○3Dプリンタを紹介し、どこでもドアの仕組みをパーフィットの思考実験のスキャナーと同機能だと仮定する。その上で再度使ってみたいかを問う。「怖い」「嫌な気分」などの答えを想定している。</p> <p>○どこでもドアを開ける時点と別の場所に出る時点がどれくらい時間的に隔絶しているか、前後に当人の身体が残ってしまったらどうなるか、身体が消去されてもたとえばのび太はのび太で有り続けることができるか、などがポイント</p> <p>○自由な話し合い。講師は参加者が自律的に話し合うことができるよう配慮する。4年生と5、6年生をグループにして、4年生の発言を上級生が助けるように促す。</p>	

参考資料 2<sup>10</sup>

## 「宮大附属土曜講座」アンケート集計結果

## 【講座 2】「やってみよう！こども哲学」

10月15日（土）10：00～10：50 多目的教室

宮崎大学教育学部 准教授 柏葉武秀 先生

参加者数：12名 欠席者数：3名 アンケート提出数：12

## 1. 柏葉武秀先生の「やってみよう！こども哲学」に参加してどうでしたか？

- ・物事をとても深く考えることができて、とても楽しかった。(3)
- ・はきはきと話すことができてよかった。
- ・どこでもドアについて考えて、とても楽しかった。(4)
- ・少し楽しかった。
- ・ふだん考えないことを考えられた。
- ・哲学ということをよく解るように教えてくれたので、よく解り楽しかった。
- ・他の学年と交流が出来たこと。
- ・とても哲学は難しいと思ったけど、面白かった。

## 2. また、この講座が開催されたら参加したいですか？

参加したい (8) もっと楽しいなら参加したい (3) そうでもない (1)

## 3. 楽しかったことや面白かったことがあったら書いてください。

- ・物事を深く考えることができた。
- ・本当の自分はどっちなのかと考えることが面白かった。
- ・ドラえもんを題にした授業が楽しかった。
- ・ドラえもんのどこでもドアの間のことを考えたこと。
- ・どこでもドアを使っていたので、解りやすかった
- ・どこでもドアの5cmの幅でにせものと本物に分かれるという事。
- ・自分が見ている身近なことで、哲学ができるのがとても面白かった。
- ・とても頭がこんがらがったけれど、とても楽しかった。
- ・どこでもドアが本当にあったら、私は使わないです。理由は自分の為にならないから。
- ・3Dプリンターで考えたこと。

## 4. 柏葉先生に質問したいことがあったら書いてください。

- ・柏葉先生は、何がきっかけで哲学のことについて教えようと思ったのですか。(2)
- ・普段はどのようなことを教えているのですか？
- ・柏葉先生はいつからこのようなことを始めたのですか？

## 5. 来年以降、どのような講座があれば参加したいですか？

- ・こども哲学 (4)

- ・卵をどうやったらわずらわずにむくか。
- ・実験する講座 (3)
- ・音楽に関する講座
- ・発達障害のこと
- ・星 (星座) のこと
- ・理科
- ・ユニバーサルデザインの講座
- ・歴史のこと (2)
- ・都道府県 (地理) のこと
- ・歴史 (日本史, 世界史)
- ・身近なことのしくみについて
- ・本についての講座

## 文献表

- 岡本裕一郎（2013）『思考実験』筑摩書房。  
 河野哲也（2014）『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出書房新社。  
 フィリップ・キャム（2015）『共に考える』榊形公也監訳、萌書房。  
 オスカー・ブルフィニエ（2006-2007）『こども哲学』全7巻、朝日出版社  
 マシュー・リップマン（2015）『子どものための哲学授業』河野哲也、清水将吾監訳、河出書房新社。  
 デレク・パーフィット（1998）『理由と人格』森村進訳、勁草書房（原書1986年）。

<sup>1</sup>ウェブサイト（<http://ardacoda.com>）の情報によれば、定期的に「こども哲学」講座が開かれている。筆者もその一つを受講し、大いに学ぶところがあった。

<sup>2</sup>ここのウェブサイト（<http://p4c-japan.com>）は各種情報が充実している。このサイトを訪れることで、この国のこども哲学について概略を知ることができる。とりわけ「資料」ページは有益である。

<sup>3</sup>2014年度土曜講座「教師で哲学してみる」開講にあたって附属中学の保護者向けに配布してもらった。本論文では文末表現などを改変している。

<sup>4</sup>岡本（2013）で一連の思考実験の概略を手軽に読むことができる（35-39）。

<sup>5</sup>ハンドルネーム「飲茶」氏のウェブサイトを参照（<http://www.h5.dion.ne.jp/~terun/doc/sikou2.html>、2017年1月9日アクセス）。

<sup>6</sup>ここではパーフィットそのひとの論理展開をふまえつつ、やや自由に思考実験を解釈している。

<sup>7</sup>この立場ではじっさいには人格同一性は重要ではなく、心理的・身体的連続性の方が重要であるとみなす。

<sup>8</sup>割愛したスライドは下記のとおり。

発問4「さらにかんがえてみよう」

「女の子がどこでもドアで学校についてから、5日後に家の女の子は消えてしまいます。

みなさんは使ってみたいですか。

それはどうしてでしょう。

それとも使うのはいやですか。

それはどうしてでしょう」

<sup>9</sup>もっとも、小グループのディスカッションでは、6年生がリーダーシップを取りながら、下級生から上手に言葉を引き出してきていた。4人一組編成が功を奏したかもしれない。

<sup>10</sup>このアンケート結果は宮崎大学附属小学校PTAの行為で再録を許していただいた。記して感謝したい。